

特 258

722

菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其十)

始



特258  
722



臨濟宗  
建長寺派  
菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其七)





碧巖錄提講

第二十則 翠微禪板

坐禪用心記に、「這箇是阿誰、不會知名、非可爲身、非可爲心、欲慮慮絕、欲言言窮、如痴如兀、山高海深、不露頂、不見底、不對緣而照、眼明于雲外、不思量而通、宗朗于默說、坐斷乾坤、全身獨露、」翠微禪師も恁麼、——臨濟禪師も恁麼、——龍牙禪師も恁麼、——諸君も衲も恁麼、——山も川も、天も地も、時間も空間も恁麼、——一切恁麼ならざるなし。——



## ◎垂示

垂示云、堆山積岳、撞牆磕壁、佇思停機、一場苦屈、或有  
 箇漢、出來、掀翻大海、踢倒須彌、喝破白雲、打破虛空、  
 直下向一機一境、坐斷天下人舌頭、無備近傍處、且道、從  
 上來、是什麼人曾恁麼、試舉看、

## 讀方

垂示に云く、堆山積岳、撞牆磕壁、佇思停機せば、一場の苦  
 屈なり。或は箇の漢有つて、出で來つて、大海を掀翻し、須  
 彌を踢倒し、白雲を喝破し、虚空を打破し、直下に一機一境  
 に向つて、天下の人の舌頭を坐斷せば、備が近傍する處無か

らん。』且く道へ、從上來、是什麼人が曾て恁麼なる。試みに  
 舉す看よ。』

「山岳——牆壁」此の二句、宇宙絶対的の眞理そのもの、  
 充滿して居る様子を云うたもの。』堆はウツダカク。』撞はツ  
 キアタル。』磕は堅きものと堅きものとあつた時の音聲。』  
 ——知るや知らずや、眼に一杯、耳に一杯、鼻に一杯、口に  
 一杯、——天に一杯、地に一杯、——山にも川にも一杯。  
 ——何ものが一杯、——絶対の眞理が、——超越の大道  
 が。——「前水復後水、古今相續流。」——「水來非吾過、去亦  
 非吾功。」——「佇思停機」逡巡、躊躇。何れも斷行に乏しきこ



と。俗に云ふグズで確信と決斷心なきこと。故に眞理の選擇に迷ふ。佛教を研究するかと思ふと神道を研究し、神道かと思ふとキリスト教研究。朝に東門に走り夕に西門に行くと言ふ一處不定。あれか、これか、あれもいかん、これもいかん。——之是等の人を指して、一生涯あぶ蜂とらずにその日くを送る大馬鹿者と云ひます。衲などはあぶ蜂とらずの會長であるかも知れん。——「一場苦屈」一場は、一席、一幕、一時、一處。——苦屈は唐宋時代の俗語。骨折損のくたびれ儲けの意であると井上君は示された。『無駄骨を折つた、——無駄仕事をした。——擔雪埋井、——向月投石。——正眼に觀じ

來れば、人間總ての事柄は一場の苦屈。——釋迦でも達磨でも、孔子でもキリストでも。——況んや其の他のものに於てをや。一場の苦屈ならざるなし。——「掀翻」手で物をひつくりかへすこと。「踢倒」足で物を蹴り倒すこと。——正しやう宗白雲端の章に、「一拳拳倒黃鶴樓、一趯趯翻鸚鵡洲。」とあります。衲等の平生底の一舉手一投足、それが其の儘、一拳々倒、——一趯々翻でなければならぬ。——諸君、平生底が斯くなりますか。斯くなるまで修行すべきであります。——「須彌」佛教宇宙論で説く世界の中央の金輪上に屹立して居る高山のことであると云ふ。——詳細は佛教學専門家に質問なさるべ



し。佛教説でなく、現今眞箇の須彌山は何處にあります。諸君あてゝ見たまへ。——「喝破」口を以てすること、蓋し一應の説。——「打破」手を以てなすこと、蓋し是れも一説を云ふ。——「喝破、打破」の例語は、「鑊湯、爐炭、吹教、滅、劍樹、刀山、喝便、摧。」——果して恁麼になし得るや。——「白雲、虚空」凡聖、迷悟、是非、得失、生死涅槃、煩惱菩提、一切の相對、總ての差別。——「直下」タバチニ、一刻の猶豫もなく、即時、即刻、——即座、——即席、——その場。——

「向一機一境」如何なる時にも、如何なる處にも、如何なる人にも、それに能く順應し、——能く妙對する。「毘盧愛飲彌勒酒、

文殊醉倒普賢扶。——對一説。——「無、爾、近、傍、處」——「鏡川圖山、鳥飛不渡。」——何人も接近することは出来ぬ。廣義に云へば、釋迦でも達磨でも氣を呑み聲を飲む。——遠く見て近寄るべからず。——「從上來」昔より今日に至るまで。云ひ換へれば、天地が開けて以來。——左に重ねて臭口を開きます。眞理、大道、佛の心、神の誠。多くの人は、鐘太鼓を鳴らして尋ねるか或は金銀を掘出す如く礦脈を求めなければ、見ることも採ることも出来ぬ、と居らるゝ。それが抑、錯誤の根源。——眞理と云ひ、大道と云ひ、佛の心、神の誠、常に恒に露堂々、頭上漫々、脚下漫々、——



填溝塞壑つみみぞであります。經に、「佛の眞法身は猶虚空の如し。物に應じて形を現ずるは水中の月に似たり。」と。佛の眞法身、それが眞理、それが大道、それが神の誠。——水中の月、水ある處に月は必ず現ず。看よ柳の綠に眞理が現じ、花の紅に大道が顯れ、山の峨々に、川の潺々せんぜんに、神の誠、佛の心、それが漫々と流露して居る。——知るべし。一塵一埃、一居一動、眞理の外にあるに非ず、大道の外にあるに非ず、一居一動、一塵一埃、そのまゝが悉く佛の心にして神の誠である。——そのありさまを形容して、堆山、積岳、撞墻、磕壁かつぺきと圓悟禪師えんごぜんじが示されたのである。——然るに恁麼いんまの道理に暗き人は、眞理は

どこに、大道はどこに、佛の心、神の誠、どこにく、と頭を以て頭を尋ね、牛に騎つて牛を求むる、と云ふ世にも稀なる無駄骨折りの大馬鹿ものである。可謂、一場の苦屈と。——茲に超佛越祖の漢あり。威儀堂々、大手を振り肩を怒らし、空手にして勦頭を取り、坐したま、大海を掀翻きんぱんし、歩行して水牛に跨がり、徐行のま、須彌を踢倒てきたうし、白雲に似たる迷悟の鐵鎖金鎖を喝破し、虚空に似たる禪病、悟病、法病を打破し、有佛の處は元より、無佛の處にも止まらず、而して其の時、其の場、其の機に順應して接化度生せつげだせうさる、變化の妙、布教傳道さる、奇計の術、可謂、「理上絶疎親、法中無彼此。」と。——



かゝるお人の一言一句は悉く天下の人の舌頭を坐斷し、  
 かゝるお方の一居一動は總て人天をして近傍するに道なからし  
 む。—— 恁麼の人を唯我獨尊の人と云ひ、恁麼の人を自立更  
 生の人と呼ぶ。—— 如是人の名は何と云ふ。而して世界の何  
 處に御座る。—— 翠微禪師の如きが其の人、臨濟禪師の如き  
 が其の人、—— 恁麼の兩禪師に對して一場の苦屈を演じたる  
 人は龍牙禪師其の人である。—— 萬松老人は龍牙禪師を稱し  
 て大器晩成の人と云うて居らるゝ。果して晩成でありし。お互  
 は早成か將た晩成か。—— 早成にもあらず晩成にもあらず、  
 中ぶらりの人間は衲であります。

◎本則

舉、龍牙問翠微、如何是祖師西來意、微云、與我過禪板來、  
 牙、過禪板與翠微、微、接得便打、牙云、打即任打要且無  
 祖師西來意、牙又問臨濟、如何是祖師西來意、濟云、與我  
 過蒲團來、牙、取蒲團過與臨濟、濟、接得便打、牙云、打  
 即任打要且無祖師西來意、

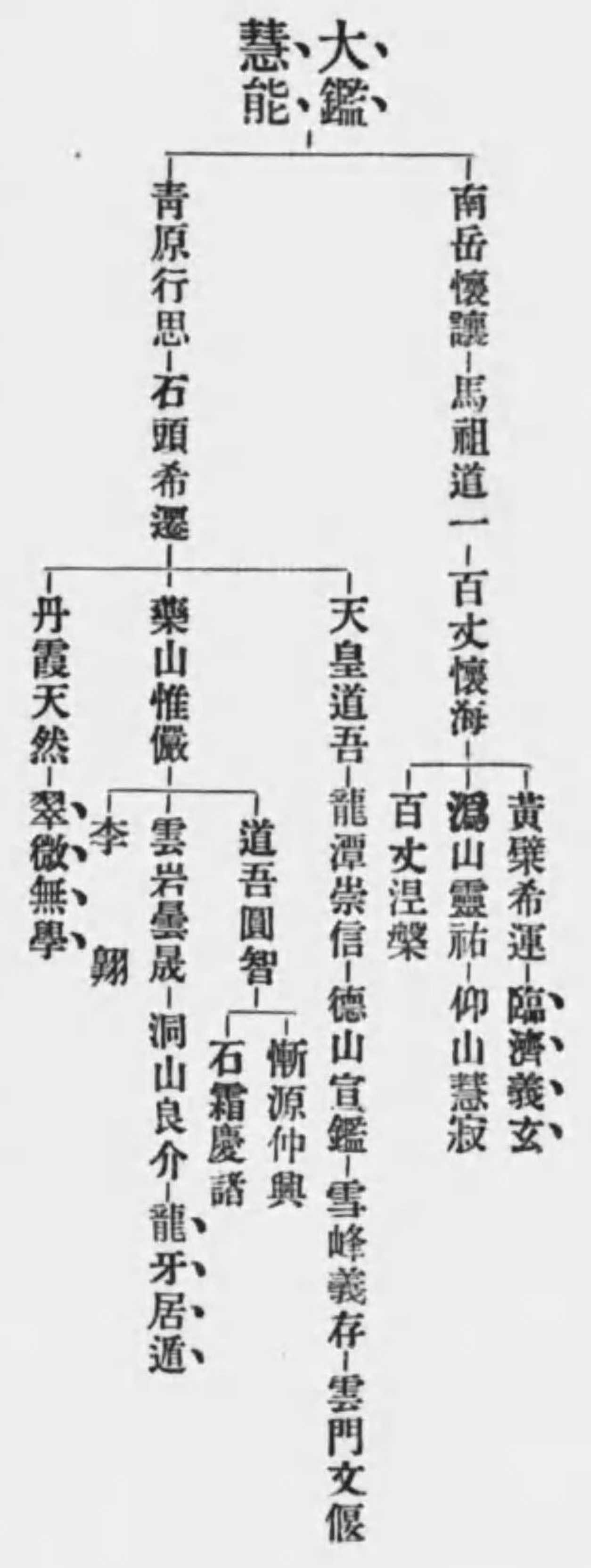
讀方

舉す。龍牙、翠微に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來の意。」微  
 云く、「我が與に禪板を過し來れ。」牙、禪板を過して翠微に



與ふ。微、接得して便ち打つ。牙云く、「打つことは即ち打つに任す。要するに且つ祖師西來の意無し。」牙、又臨濟に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來の意。」濟云く、「我が與に蒲團を過し來れ。」牙、蒲團を取り臨濟に過與す。濟、接得して便ち打つ。牙云く、「打つことは即ち打つに任す。要するに且つ祖師西來の意無し。」

本則の文字、及び龍牙、翠微、臨濟、三禪師の法脈と略歴を述べて見ませう。龍牙、翠微、臨濟、以上の三禪師の法脈、其の關係を表示すれば左の如し。



翠微無學禪師は慧能禪師から五代目、臨濟義玄禪師は慧能禪師から六代目、龍牙禪師は慧能禪師から七代目。左に三禪師の略歴の其の一端を。



龍牙、此の人は唐文宗の大和五年に生れ、後唐莊宗の同光元年に死す。』日本の弘法大師の死なれた年に生れたことになり  
ます。

翠微、此の人の傳記は頗る不明、生死の年月日も不傳である。されど御師匠様は、木佛を焼いて舍利を取ると云はれた丹霞天然禪師である。嚴師好弟子を出す、と云ふ位でありますから、翠微禪師其の人の御人格も知るべしであります。

臨濟、此の人は五家七宗の中の臨濟宗の開祖、傑僧中の傑僧。最初黃檗希運禪師の會下。或日、第一座の勧めらるゝにまかせ、黃檗禪師に向つて、「如何是佛法的々の大意」と尋ねると、イキ

ナリ黃檗は臨濟をナグリつけました。同じ問を三度繰り返しましたが、三度ともヒドクなぐりつけられたものであるから、臨濟閉口して、黃檗禪師の處を辭して大愚禪師の處へ行き、大愚禪師と問答、—— 大愚の言下に於て大悟、—— 後、黃檗禪師の法を嗣ぐ。』詳細は臨濟禪師の語録にあり。往きて見るべし。—— 或人は云ふ、「臨濟禪師は黃檗禪師の處で仕込まれたと云ふよりも寧ろナグリ込まれたと云ふ方が事實に近い。臨濟禪師は、黃檗禪師の處で、何事に就ても要領を得ない時にはナグルに如くなし、と悟つたものか、自分で一本立ちになつて禪僧を接するや、師匠傳來の秘法を發揮し、大いに人をナグリつけ、所



謂棒喝の毒手を弄したのであります。故に現今臨濟宗の御師家さんは、何かにつけ人をナグリつけます。(是は其の人の邪解、然らざれば、不幸にしてナグルことの上手な禪僧に逢うたのでありませう。必ずしも臨濟宗の師家はナグリ倒すと極つては居りません。) 要するに彼等は臨濟禪の病氣に感染して居るので、彼等の棒喝には大した意義は含まれて居ません。まア狂氣きまがひ按摩と思へば間違ひありますまい。」と。——一寸面白い御見識でありますから、諸君の御参考迄に添へた次第であります。』

——「祖師西來意」禪家の大問題と云ひ傳へて居る。祖師西來意と云ふものゝ、必ずしも祖師の二字に執着すべからず。要は

自然の眞理、當然の大道。——眞箇の眞理、大道、其ものゝ對しては、如何なる人でも、一句を添へることも一句を減ずることも出来ぬ。無論問ふべきものに非ずと共に答ふべきものに非ず。それを問ひ、それを答ふる、それが祖師西來意である。

——「禪板」禪者の使用品。禪事に使用するから禪板と云ふものゝ、別段珍重する程の物ではありません。板の一片である。されど使用する其の人の道力如何に依りて、龍ともなれば蛇ともなる。人を喜ばしむる品にもなれば人を苦しむる品にもなる。

——「過來」すこし來れ。チヨツトとつて呉れと云ふ意なり。

——「蒲團」坐禪をする時に使用する具。圓形もよし、方形も



あしからず。長形の蒲團を使用なさるお人もあります。——  
 「接得便打」過し來りし禪板、チヨツトとつて呉れた蒲團を受取るや、間に髪を入れずすぐさまなくつた。接得とは、おきに御苦勞様と云ふ程の意味。——茲に祖師西來意の端的が漏出し居る。諸君、見えますか。——「打即任打」御貴殿は主、私は伴。主に伴が打たるは當然、決して手出しは致しません。お打ちなさい、お打ちなさい。是も一時。茲の處にも祖師西來意が流露して居ります。——「要且」要は結局の意。』且は、また、それでも。衲は是れ以上知りません。

禪家では、問答商量を法戰、法の上の戰爭と云うて居ります。

戰爭と云へば無論、殺すか殺さるか、何れにしても眞劍である。禪家の問答商量は眞劍、——一命をかけてやります。然らざれば、正法の光明、正禪の妙味は流出致しません。茲に古人の禪學上眞劍の問答商量がある。——或日龍牙禪師が修行中、翠微禪師に向つて、「達磨大師は一體なにに支那へお出になつたのであります。提唱をするでなし、在家法談をやるでなし、少林寺へ隠れて面壁九年、尻の腐るのも知らずに御座つたと云ふ。——一向達磨大師の西來なされた意義が判りません。」と戦端を開きました。翠微禪師は曾て法戰場中に於て眞劍勝負は數へ盡せぬ程經過して居る所謂老將軍。——龍牙禪



師の問刀に觸れず、大人が子供を相手にするが如く、自若として曰く、「チヨツトあすこにある禪板を持つて来ておくれ。」と。龍牙禪師、「はい。」と云うて正直に禪板を持ち來つて翠微禪師に差出しました。すると翠微禪師、「これは御苦勞様。」と云ひつゝ、持ち來つた禪板でピシヤツと龍牙を打ちました。打たれた龍牙禪師云く、「打つはあなたのお手のお手の中から祖師西來意が飛出る打ちになつても、要するに私の質疑そのもの、正鵠には當つて居りません。まさかあなたのお手の中から祖師西來意が飛出る譯ではありますまい。」(處が手の中から祖師西來意が飛出る。翠微禪師は、戰はずして人の兵を屈すと云ふ戰略家である。

燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや、で、龍牙禪師、翠微禪師の胸中を知る能はず、残念々々。——去つて臨濟禪師の處へ行き、前と同じやうに「如何是祖師西來意」と龍牙禪師、得意の一刀をつきつけました。すると臨濟禪師、是又黃檗禪師の下で永年法戰場に千辛萬苦なされた一方の名大將、つき出す一刀を輕々に受け流し、「チヨツトあの蒲團をとつて。」と云はるゝと、龍牙禪師、「承知しました。」と蒲團を持ち來つて差出すと、前に翠微禪師のなされたと同一作法で、「おゝきにありがたう。」と云ひながらピシヤリとなぐられた。龍牙禪師は若武者、法戰場中に經驗が少い。——故に聊か怒氣を帯び、「打つなら打つてもよい。



いくらなりともお打ちなさい。いくら打つたからとて蒲團から祖師西來意は躍り出しません。」と。(處が蒲團から祖師西來意が躍り出てをる。)

翠微禪師は、龍牙禪師質疑の時、坐禪をして居られた。それで禪板を持し來れと云はれたのだ。

臨濟禪師は、龍牙禪師質疑の時、讀書でもして居られた。それで蒲團を過し來れと云うたものならん。

以上井上君のお説、或は然らん。

翠微禪師と臨濟禪師と期せずして期したる如く、龍牙禪師に對しての接化底は、所謂前聖後聖其の揆一なり、君子は千里

同風、それでありませぬ。——龍牙禪師、住院の時、問僧に答へて曰く、翠微、臨濟の兩禪師、明即明、要且、無祖師意、と。

——茲に龍牙禪師の本領、祖師西來意の端的、明々白々に流露して居ります。隠さんと欲すれども隠す能はず。議論ではない境界、——理窟ではない實際、——禪は特に實際を貴び、境界を賞します。『龍牙禪師も「要且無祖師意」と云ふ處まで境界が實際に進みしは、翠微禪師の禪板、臨濟禪師の蒲團、それになぐられた賜である。果して然らば、衲等も何人かに充分なくらるれば相應の禪僧になつたかも知れぬ。不幸にして禪板にも蒲團にもなぐられなかつた。——艱難は汝を玉になす、とあ



るが、古人我を欺かずであります。

◎頌

龍牙山裏龍無眼、死水何曾振古風、禪板蒲團不能用、只應分付與盧公、

這老漢、也未得勦絕、復成一頌

盧公付了亦何憑、坐倚休將繼祖燈、堪對暮雲歸未合、遠山無限碧層層、

讀方

龍牙山裏、龍に眼無し。死水何ぞ曾て古風を振はん。禪板、蒲團用ふることに能はず。只應に分付して盧公に與ふべし。

這の老漢、也未だ勦絶することを得ず。復一頌を成す。

盧公に付し了るも亦何ぞ憑らん。坐倚して將に祖燈を繼がんとすることを休めよ。暮雲の歸つて未だ合せざるに對するに堪へたり。遠山限りなき碧層々。

頌に對して例の婆言を添へます。「龍牙山裏」龍牙禪師は湖南の龍牙山妙濟院の住職である。故に其の事實をそのまゝ起句の鷲頭に吟出されたのは、次の句の死水云々を云はんが爲の伏線である、と知るべし。——「死水」これはタマリ水のこと。明鏡死水と云ふときは死を靜と見るべし。『死水はクサリ水と云ふ意味もある。活龍不滯水、と云ふは死水に居らぬと云ふこと。』



されど、水清ければ魚棲まず、と云ふこともある。小魚は死水を嫌はず寧ろ死水を愛す。お互は小魚である。常に死水に浮沈して居る。——「古風」古代の風儀、古法、古例。』支那の國風は古人を尊敬して今人を輕視する習慣がある。日本に於ても、支那の國風にかせて、今人より古人に尊敬を奉呈すると云ふ因襲的信念がある。お互が熟知する通り。』一も古人、二も古人、古人古人と云うて古人を善意に解釋するは、如何にも古風で云ふに云はれぬ妙味があります。——「分付」意味は分與、分附、又は附屬と云ふ位に見て大過無し。——「盧公」此の盧公に就て古來二説ある。一は六祖慧能(盧行者)、一は雪竇禪師(盧氏)。

衲は考古の力が極めて僅少、故に證據を列擧して、此の盧公は六祖である、と斷然確定は出来ません。されど雪竇禪師は盧氏の出でなくして李氏の出、六祖禪師の前身は盧行者である。之に由つて是を觀れば、此の頌の盧公は無論六祖慧能禪師である。如何に禪僧が自己を尊大に聲明するにしても、自分自身で、盧公に分付せよ、とは普通常識のある僧であれば遠慮する。況んや雪竇禪師の如き大作家に於てをや。但し表面に與へて裏面に奪ふことはある。念のため云ひ添へて措きます。——「這老漢」是れは龍牙禪師のことである。(雪竇と見る人もある。)——「勤絶」書經に「勤絶其命。」と云ふことがある。蓋しそれより



採り來りし熟字ならん。意味は「ヤツテシマへ。」と云ふこと。要するに龍牙禪師のことにつき、不充分でありしと云ふこと。

「何憑」俗に「シヤウガナイ。」と云ふ意味。お互が平生、此の様なもの「シヤウガナイ。」貰つても困る、と云ふ。蓋しそれに類似して居る。——「堪對、遠山」此の二句は、宇宙の自然美、天然の活畫、それが直ちに佛の姿、それが直ちに神の體、それがそのまま、禪の流露にして祖師西來意の端的。——更に婆言を重ねます。

一寸の筆頭、三尺の劍、盡く是れ邦を安んじ國を定む、で、小は小なりに大は大なりに、そのものそれづくに力量と効能があ

る。若しそのものそれに相應する力量と効能が無ければ、寧ろ國家に對して有害無益の者と云ふべし。特に禪僧として禪僧たる力量と効能が無ければ、一箇の死骸が上々下々して居るのみ。事實の娑婆ふさぎ、息をして居る糞造器である。——昔も今も、東にも西にも、實際娑婆ふさぎの糞造器が多い、とのこと。無論衲も其の中の一人、慚汗々々。——龍牙山に住居して禪僧風を吹かし堂々と構へて御座る處は、如何にも龍牙山に相應した活龍の如くに聞えるが、お氣の毒のことに大切な眼が無い。眼が無ければ死したる龍も同様、力量も無ければ効能も無い。縦し生きて居たところが、眼が無ければ子々同様、子々では何事



もなす能はず。死水裏、溜り水の中で蠢々<sup>しゅんしゅん</sup>として居るが身分相應、到底昔の高僧碩徳のなされた殺活自在の古風を振り廻すことは出来るものでない。——翠微の禪板、臨濟の蒲團、龍牙禪師に活眼があれば、祖師西來意は禪板にも蒲團にも不離當處、常湛然、どころではない。禪板そのものが、蒲團そのものが、それが、それそれである、と云ふことが判る。無眼子<sup>むがんす</sup>の爲に、翠微禪師の要求した禪板、臨濟禪師の請求なされた蒲團、それに對して残念なるかな、龍牙禪師は機械的に盲動したるのみ。——翠微禪師も臨濟禪師も、龍牙禪師が禪板や蒲團に對しかくまで機械的に盲動するとは始めより豫想せざる處であつた。

龍牙禪師が禪板や蒲團を活用することが出来ぬことを多少なりとも承知して居つたら、龍牙禪師に禪板や蒲團をやらす、彼の五祖禪師の處に米搗きをして居つた盧行者<sup>ろあんじや</sup>其の人を呼び來つて、翠微禪師は禪板を渡し、臨濟禪師は蒲團を渡したであらう。盧行者であつたら、或は禪板や蒲團を活用したかも知れぬ。衲<sup>なほ</sup>は云ふ。敢て昔の六祖大師を呼び來らずとも、禪板や蒲團の使用法位は昨今參堂した新發意<sup>しんはついち</sup>でも承知して居る。されど向上の使用法に至つては、三世の諸佛、歴代の祖師と雖も是れ亦如何ともなす能はず。——

以上の一頌では、祖師西來意、未だ充分ならず。故に雪竇禪



師、龍牙禪師に托し、「這老漢、也未得勤絶」手ぬるいことではなかく、自白する白拈賊でない。しめろ、しめつけろ、打て打て、二十棒も六十棒も打ちのめせ。——「復成一頌」米搗き先生の盧行者其の人に必用缺くべからざる品であれば格別。思ふに、盧行者にも目下の處、其の様な物は無用の長物かも知れぬ。聞く盧行者は五祖禪師より衣鉢を頂戴されたと云ふことであるから、無用品と知りつゝ、下さる物は夏も小袖と云うて頂戴なさるかも知れぬ。——それは盧行者のまだお若い時のこと。既に老人になられては、衣鉢を以て嗣法の證としたり、禪板、蒲團を以て佛祖の命脈を後世に傳へたりして、世間の名聞に引か

れ固有の自由を失する様なことはなさらぬ。——かゝるお人に禪板を差し上げたり、蒲團を進呈したりするは、却つてお邪魔になると共に大なる迷惑。——要するに一物を添へず、一物を減ぜず、そこが盧行者の眞面目にして、そこが祖師西來意の端的である。——然らば祖師西來意の端的底、畢竟如何。曰く、「堪對暮雲歸未合、遠山無限碧層々。」——是は佛か、祖師か、般若か、西來か、東來か、有意か、無意か。——文珠に似て文珠に非ず、普賢に似て普賢に非ず。——暮雲は無心に似て往來、遠山は無念にして層々、——暮雲は昔より暮雲、——遠山は今に至つて遠山、——遠山は遠山のまゝ、暮雲



は暮雲のまゝ、理あつて述ぶることを得ず、口あつて語ることを得ず。如何なる雄辯家でも、如何なる達筆家でも、暮雲は暮雲と云ふより外に云ひ様はない。遠山は遠山と書くより別に書き様は無い。所謂如是、——嗚呼如是々々、昔も如是、今も如是、佛も如是、祖師も如是、聖人も如是、凡夫も如是、長者は長者で如是、短者は短者で如是。——「誰把金梭横玉線、織成十丈錦通紅。」——楓のにしき神のまにく。——睡美不知山雨過、覺來殿閣自生涼。」——強ひて心頭を滅却するに及ばず。——「桃花滿地春將半、杜宇催歸月過三。」——「麴頭酒熟人皆醉、微雨續天烟、織雪、寒風簸水月、篩梅。」——

林下烟濃花正紅。」——何れも祖師西來意、——何れも禪板、蒲團、——何れも暮雲、遠山。——咄、咄、「工夫枉用渾間事、笑倒西來碧眼胡。」——況んや口喃々するに於てをや。況んや筆紛々たるに於てをや。——暮雲、遠山、——茲には禪道佛法、一機一境の沙汰はない、向上別作の好生涯だ、と或人は云うてをらるゝ。果して恁麼の處が向上別作の好生涯か、——人々自己の力で取捨すべきである。(龍牙禪師のことにつき異説あり、今は略す。以上は只一説に依るのみ。)天童禪師は、雪竇禪師と正反對、龍牙禪師を格外の作家として稱賛なされた頌に曰く、



蒲團禪板對龍牙、何事當機不作家、未意成禪明目下、恐將流落在天涯、虛空那掛劍、星漢却浮槎、不萌草解藏香象、無底籃能著活蛇、今日江湖何障礙、通方津渡有舡車、』

「蒲團——何事」此の二句は、臨濟の爲に蒲團を將ち來り、翠微の爲に禪板を過し來る。龍牙禪師は、打つことは打つに任す、など、鈍いことを云はずに、臨濟や翠微の横つ面をアツと云ふ程打つてやればよかつたに、一向作家らしい氣鋒を露はさなかつた。(茲が作家の氣鋒。)  
「未意——恐將」此の二句は、龍牙禪師こそ、一機一境の圈積裡に落ちて天涯流離の客となつたり、成敗の跡を歴々と印して目前の事を片附ける、と云ふ様なきは

くしたことは眞平御免を蒙り度い、と云ふ家風の人である、と云ふ意味を述べた。(所謂、隨流認得性底の漢。)  
「虛空——星漢」此の二句は、龍牙禪師の心中、虛空に劍を掛けるが如く、天の河に槎を浮べるやうなもので、知見でも解會でも窺ふことの出來ぬ境界である、と卓上された。(蓋し天童禪師の心中のことならん。)  
「不萌——無底」此の二句は、龍牙禪師如何にも無機用の如くに見ゆれど、實際は不萌の草に香象を藏すことを解し、無底の籃に能く活蛇を著くるの大伎倆がある、と更に卓上された。(果して恁麼なりや。眞箇のお手元拜見。)  
○曹山禪師の語に、不萌草甚麼、としてか香象を藏す。○夾山禪師の語



に、路に活蛇に逢は、打殺すこと勿れ、即ち無底の籃に盛り持ち歸れ。』——以上の兩禪師の語より天童禪師は換骨脱體して不萌——無底云々と頌じられた。』結末の二句「今日——通方」是れは、龍牙禪師の垂語に、江湖人を礙る意なしと雖も時の人透不得なるが爲なり、と云ふのがあります。それを天童禪師が轉用して、「今日江湖何障礙、通方津渡有紅車」と吟じられたのである。——其の意味は所謂、天に四壁なく地に門なし。四方八面あけばなし。左せんと欲する人は左せよ。右せんと欲する人は右せよ。特に昨今は汽車あり汽船あり、電車あり自動車あり。——空中を翔ける飛行機、飛行船あり。陸行も

海行も空行も又は地下行も實に自由自在。——（是れは龍牙禪師の爲人度生底、思ふがまゝ。）上來の一頌、龍牙禪師を吟賛したと云ふものゝ、其の實は天童禪師御自身を賛頌したのである。——それと共に禪そのものゝ様子を併頌なされたものと納は深く信じます。——禪には、禪の特色、禪の本領、禪の活用、禪の正體、禪の面目なぞと云うて、世間と異なつた一種不可思議なる何物かがある様に、思ひもし語りもする人が古往今來無量無數であるが、決して禪は不可思議なものでない。世間そのまゝ、それが禪の面目、禪の正體、禪の活用、禪の本領、禪の特色である。——特に注意すべきことは、世間その



まゝと云ふ、そのまゝに深く留意すべし。——然るに動もすれば世間を輕視して出世間を重視する人がある。抑々それが禪と云ふものを一種不可思議に見る邪解である。『衲は常に口を開けば、必ず純一無雜、打成一片、と云ひます。是れが世間の通則、通道、通法、通規、通行。若一、人間相互の上に於て、物と我と不一致、肉と靈と不協和であつたら、如何なる結果を來す。諸君既に御承知の筈。國家は是が爲に亂れ、家庭は是が爲に破れ、一身は是が爲に滅亡。——是れに反し物と我と打成一片、肉と靈と純一無雜であれば、其の結果、一身は出世し、一家は圓滿、一國は泰平。——國は大小を論ぜず泰平を以て國の誇

りとなし、家は貧富を問はず圓滿を以て家の譽れとなす。人は知愚を議せず出世するを以て人たる價值を定む。——果して然らば純一無雜、打成一片、それが世間をして眞箇の世間となさしむ。(世間の外に出世間なし。)それが禪の正體にして禪の本領。——それが禪の特色にして禪の活用。——雪竇禪師が「堪對暮雲歸未合、遠山無限碧層々」と吟出なされたのも、天童禪師が「今日江湖何障礙、通方津渡有舡車」と頌出なされたのも、共に俱に純一無雜底、——打成一片底。——知るべし、佛法と世法は身と心、一つ缺けても危うかるらん。——禪即世間、世間即禪、——お互が打成一片になるべし。——



お互が純一無雜にならざるべからず。――

(昭和十二年五月十五日講演)

### 第二十一則 智門蓮華荷葉

古徳云く、「機々彼々相投合、鏡闕圓兮鑿闕方。」問ふ人と答ふる人と、機々投合する。水と水とに似て、火と火との如くであれば、總てが圓融無礙。鏡の圓かなるも其の圓を闕き、鑿の方なるも其の方を闕く。――本則の問答の如きは恁麼なる能はず。お互は本則の恁麼なる能はざるを學ばずして、お互は主客相對の間に於て機々投合する、それを第一に修養すべきであります。衲が家の即今禪と謂ふは即ちそれでありませう。



## ◎垂示

垂示云、建法幢、立宗旨、錦上鋪花、脱籠頭、卸角駄、太平時節、或若辨得格外句、舉一明三、其或未然、依舊伏聽處分、

## 讀方

垂示に云く、法幢を建て、宗旨を立するは、錦上に花を鋪くなり。籠頭を脱し、角駄を卸すは、太平の時節なり。或は若し格外の句を辨得せば、舉一明三ならん。其或は未だ然らざれば、舊に依つて伏して處分を聽け。失敬を顧みず垂示の字句を略説致します。

「法幢」刹竿旛のことです。起源は印度。遠い昔のことは別として、迦葉尊者が阿難尊者に向つて門前の刹竿を倒着せよと云はれたことがあります。故に衲の知る範圍では、迦葉尊者の時代既に建てたものと思はれる。現今は支那も日本も、多少格位の高い寺院は常に法幢を建て、居ります。極めて平易に云へば、芝居や角力其他藝人が廣告用に建て、居る、それと同一。説教、法談、提唱、講演又は法事、祝賀を執行することを表示する場合の目標であります。』されど、此の二十一則の垂示にある法幢は事實讀んで字の如く法幢である。所謂、無邊風、月眼中眼、不盡乾坤燈、外燈、とある、その眼中の眼、燈外の燈そ



のものを舉揚する大道場たることを人天じんてんに示す、云は、隨喜渴仰者を招くまねきばた。——故に次の句に、「宗旨」とある。宗旨、茲では禪そのもの。所謂、不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛。』例せば、酒屋は酒を以て酒屋の宗旨とし、餅屋は餅を以て餅屋の宗旨となすが如く、日蓮宗には日蓮の宗旨があり、眞宗には眞宗の宗旨がある。苟も一家をなしをるものは、其の家々の宗旨がある。——「錦上鋪花」是れに二義あり。曰く、第一義門と第二義門。——第二義門より云へば、花簇々、錦簇々。』第一義門より云へば、草茸々、烟漠々。』要するに第一義と第二義は紙の表裏の如し。畢竟するに表裏あつて表裏なし。『譬如翻

錦旗、背面共是花。』——第一義、元より無かるべからず。第二義も亦必用。——「籠頭、角駄」是は慥か前の十七則に説明しておきました。故に重説を省きます。——「太平時節」云ふ勿れ天下太平と。古往今來、未だ曾て太平の時節あること無し。』國家太平、天下太平と云ふもの、何れも比較的の平穩にして眞箇の太平に非ず。眞箇の太平は所謂、太平無祥。——それが眞箇の太平である。古人云く、「達磨不會禪、夫子不知字。」恁麼は聊か眞箇の太平に似たり。——「格外句」拔群、出藍、越格。——絶對的眞理そのまゝ、それが格外の句。其の例如何と問はゞ、答へて曰く、山は是れ山、水は是れ水、——山



と云ふとき山になり、水と云ふとき水になり、此の外、更に格  
 外の句あること無し。知るべし清寥々、白的々。——「處分」  
 作行、所爲、言行。——やりかた、なされかた、しやう。——  
 「疎簾見雪卷、深戸映花開。」——恁麼は佛の處分か祖師の所  
 爲か將亦何人の作行か。必ずしも詩人の言行に非ず、歌人の所  
 作に非ず、蓋し人々の處分。——以上の意味を以下重説致し  
 ます。

此の法幢を建て宗旨を立する、と云ふことは祖師門下の一大  
 事。苟も祖師門下に衣食する人は、暫時も忘却すべからず。誓  
 つて實現せざるべからず。『現今、大法の振はざる、禪道の行は

れざる、其の理由は他に非ず、祖師門下の人に法幢を建て宗旨を  
 立すると云ふ理想なきが然らしむる。理想は實現の前提、理想  
 無ければ實現無し。目下實現の無き處を見れば、理想する人も  
 亦無きか。嗚呼、——末法。——諸君の承知せらるゝ如く、  
 衲も祖師門下の一人、勸學院の雀は蒙求を囀るの例で、沙彌小  
 僧の時代より口グセに法幢を建て宗旨を立すと云うて居るもの  
 ゝ、残念なることには其の理想が今尙實現致しません。されど理  
 想が無ければ實現はありません。理想は實現の母であります。  
 子は母胎に十月十日居住して、而して後に出生する。果して然  
 らば、衲の實現は未だ時機到來せざるか。或は流産か、又は死



産か、——然らざれば血塊か。——餘談は中止として、「建法幢立宗旨」これは祖師門下生の理想の實現、爲人度生の店開き。苟も開店した以上は、品物が澤山無ければ買手が來ない。來ても品不足のために無駄足をさせる、それは氣の毒。故に玄關構へは狭小でも奥行は深くして且つ廣きを要す。古人云く、「良買は深く藏めて虚しきが如く、君子は盛徳あつて容貌愚なるが如し。」と。其の知には及ぶべし。其の愚には及ぶべからず。』及ぶべからざる愚となりて、深く藏めた物品、(僞物でなく眞物中の一等、)それを實費で賣却すべし。——飯田師曰く、買手の方で表面の店先ばかり見て奥行を見ぬと買ひ損ふぞ。

——十人が十人、百人が百人、奥行を問はず玄關の廣大なるを見て、——師家の手元を知らず、大衆の多き、それを望みそれを目かけ、我もくと均一の粗製濫造、一夜づくりの甘酒に似たるお悟りを競うて買ひ、争うて求むる。——知らずや。禪の修行は修行中の眞の修行、學問中の眞の學問。決して名聞の爲や、生活の爲や、遊戯の爲では無い。衆生無邊誓願度、それが目的、それが爲である。』されど一盲衆盲を引く。それを恐るゝが爲に衆生に先だつて修行する。焉ぞ輕忽にすべけんや。然るに淺見薄慮の漢は、禪そのものは一種の遊藝と心得、夏期の休暇や冬期の閑時を利用して僅々一週間か二週間位で簡易



に卒業し得らるゝものと思惟さるゝから、評判の高い、修行者の多い所へ自然に足が向く所以である。古句にも、麝じやあれば自然に香かほし、とあるから、評判の高い修行者の多い所は無論結構でなければならぬ。それが中々さうはゆかぬ。——昔、汾陽ふんやう禪師の處には大衆が六人、藥山やくざん禪師の處には僅かに十人、人の數から云へば極めて少數である。參禪者少數なるが爲に、藥山禪師、汾陽禪師、正師家に非ず邪師家とは云へぬ。(是れ一例。)凡そ禪を研究せんと欲する人は、先づ以て正師家を見る眼を具せずして盲滅法往き當りばつたりでは、到底正禪の修行は出來ません。禪は滿身只是れ道となるべし。禪は滿身只是れ禪となるべし。

禪は滿身寒のときは只寒となるべし。禪は滿身熱のときは只熱となるべし。——錦上に花を鋪くも、頭上に頭を加ふるも、その人その人の腕にあり頭にあり胸にあり、否、全身全體にある。

——或人は、「建法幢立宗旨」は實に結構、錦上に花を鋪いたも同様綺麗々々と賛賞する。又或人は、「建法幢立宗旨」は實に無駄ごと、頭上に頭を重ねるも同様、見にくい〜と罵倒する。

——一樹春風、兩般りやうぱんあり、南枝は暖に向ひ北枝は寒し。時に依り處に依り是ともなり非ともなる。されど、是、必ずしも是ならず。非、必ずしも非ならず。そこに一種不可思議の妙がある。何れにせよ、禪の修養は籠頭かうとうを脱する爲、角駄かくだを卸す爲。云ひ換へれ



ば、それが禪の修行にして、それが禪の目的。迷ひは無論、悟りも、生死は元より涅槃も、正位に偏するも偏位に着するも、其中を失するや一なり。有佛の處に止まるも無佛の處に止まるも、其の止まるや一なり。一處に止まらず、一偏に着せず、隨緣赴感、左轉右轉。玉の盤に走るが如く、圓々珊々。或喜或憂、月の水に現ずるに似たり。恁麼なるこそ眞に太平の時節。茲に至れば籠頭の籠頭とすべきなく、角駄の角駄とすべきなし。籠頭、角駄、却つて下化衆生の好資料。——以上は目的、以上は理想。——

以上の如き理想の目的を實現せんと欲せば、上根上機、其の人に非ざれば徒らに理想に迷溺するのみ。焉ぞ目的を實現するこ

とを得んや。』然らば上根上機、其の人は抑々如何なる人ぞ。世間で云ふ絶對的大眞理、宇宙の實體を把握した超人格を具した人こそ其の人である。其の人こそ一を擧げて三を明らむる人。現今恁麼の人は何れの處に御座る。即今恁麼のお人は誰人か。

——諸君も無論其の人であり、衲も或は其の一人ならん。只憐む、未熟、——未成品、——未得道、——未だ然らざる底の漢。——眞箇格外の句を辨得せんと欲せば、例に依り本則そのものを手本とするより他に好消息なし。去つて智門禪師に親しく參じ、咄も、喝も、棒も、拳も、泣くも笑ふも、立つも坐するも、總てをして理想の實現、爲人度生の活機活法とな



すべし。——去れく、去つて格外の活句を辨得すべし。速かに去れ。——

◎本則

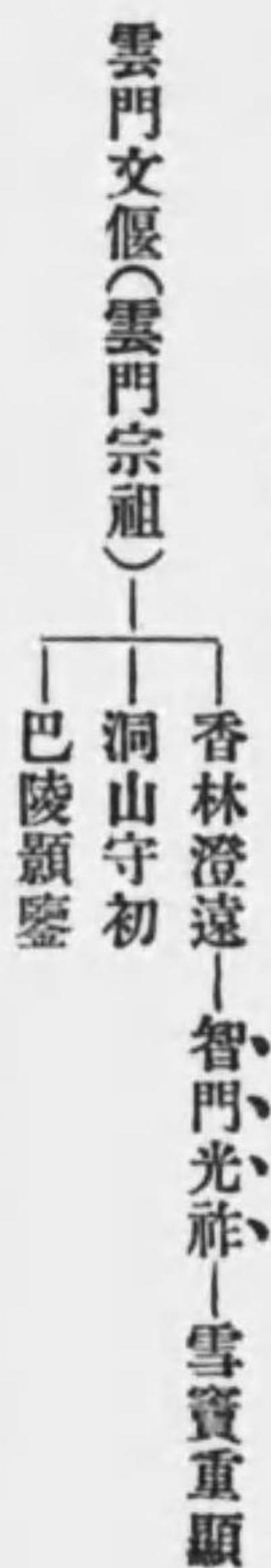
舉、僧問智門、蓮華未出水時如何、智門云、蓮華、僧云、出水後如何、門云、荷葉、

讀方

舉す。僧、智門に問ふ、「蓮華未だ水より出でざる時如何。」智門云く、「蓮華。」僧云く、「水より出でし後如何。」門云く、「荷葉。」

本則を分解すること左の如し。

「智門」智門禪師は碧巖錄中に於て時代の新しき人。碧巖錄の前身たる「雪竇百則頌古」の著者雪竇重顯禪師の御師匠様に當ります。その法系は、



隨州の智門寺に住す。故に通名を智門と云ふ。本名は光祚。此の人の生死年月、詳傳なし。察するに唐宋其間の偉僧ならん。——「未出水時」未生以前、——天地未開、——諸佛未出世、——闇の夜に鳴かぬ鳥。——「出水後」既に現前、——天地既に分れ、諸佛既に出世、夜があけて鴉が鳴く。』



——「蓮華」蓮華の外に蓮華なし。盡乾坤、全宇宙、只是れ一莖の蓮華。——「荷葉」荷葉の外に荷葉なし。盡三千大千世界、只是れ一箇の荷葉。——

左に本則につき蛇足を添へます。五家七宗と分れた禪宗の上で、雲門宗の特色は最も見極め難い所にあります。雲門宗の家風は舊參の上士でも容易に手に入らぬ、と異口同音に宗師家は云うて居らるゝ。(眞箇雲門宗の家風、即今傳來し居るや。)本則の如きは實に雲門宗の生粹で容易に解らぬ、と故釋宗演師は賞讃して御座る。』雲門の生粹たる眞箇の消息は衲が如き淺學者には見不見であります。故に諸君の御判斷に一任致します。』

——或日一僧あり、智門の光祚禪師に一問を呈した。此の問は檢主問。智門禪師を試験しようとして云ふ心底、頗る賊機のある意地のよくない問であります。問僧、果して智門禪師を試験し智門禪師の意中を全部見盡し知り盡せしや。——「蓮華未だ水を出でざる時如何。」落草して語れば、天地の未だ開けざる時、天地は如何に。諸佛の未だ出世せざる時、諸佛は如何に。お互が未だ母の胎内を出でざる時、お互の面は如何に。それを蓮華に托して、蓮華未だ水を出でざる時、蓮華は如何。——必ずしも蓮華には限らぬ、牡丹でも菊でも、大根でも人參でも。』牡丹の未だ牡丹とならざる以前、菊の未だ菊とならざる以前、大根人



參の未だ大根人參とならざる以前、其の人參、其の大根、其の菊、其の牡丹、それは如何なるものであるか。普通の禪僧では満口に霜を含むで、何とも確答のしやうがない。——そこに至ると、流石雲門宗の正師家と云はる、智門禪師だけあつて、極めて無造作、至つて手輕に、蓮華。——蓮華だ。牡丹でも菊でも大根でも人參でもない、蓮華。「若不同床臥、爭知被底穿。」で、智門禪師と同床に臥眠する同火の人でなければ、恁麼の蓮華は如何なる蓮華か、色も香もわかるものでない。——問僧、重ねて問ふ、然らば「出水後如何。」問僧の意中は、水を出でざる時は蓮華でなく蓮根で、水を出してから蓮華でありさうなもの、

と思惟して居るに反し、水を出でざる時が蓮華だ、と智門禪師答へられた。故に「出水後如何。」と問はざるを得ず。門曰く、「荷葉。」と。荷葉と蓮華と、是れ同か是れ別か。——同と云ふも不是、別と云ふも又不是。——蓮華になれ、荷葉になれ。——荷葉の外に蓮華なし。蓮華の外に荷葉なし。現象即實體、實體即現象。一と云ふも不是、即と云ふも不是。即に非ず、一に非ず、實體々々、現象々々。見牛序三の頌に、「黃鸝枝上一聲々、日暖風和岸柳青、只此更無回避處、森々頭角畫不成。」黃鸝の聲、——岸柳の色、——水を出でざる前の蓮華、——水を出で、後の荷葉、——荷葉、——蓮華、——その森々たる



頭角、——更に回避する處なし。お互が蓮華の中に、荷葉の内に、否、お互が蓮華そのもの、——お互が荷葉そのもの。問僧、智門禪師を試験するつもりで却つて自己が試験された。知るべし、問僧は籠頭を脱し角駄を卸し得ざることを。——若し角駄を卸し籠頭を脱し居らば、格別の句を辨得せざるも、最後に一句なかるべからず。最後に一句なきは、蓋し是れ最後の一句乎。——衲は云ふ、未問已前に錯、と。——

## ◎頌

蓮華荷葉報君知、出水何如未出時、江北江南問王者、一狐疑了一狐疑、

## 讀方

蓮華、荷葉、君に報じて知らしむ。水を出づれば何如、水を出でざる時は。江北、江南、王者に問へ。一狐疑ひ了つて一狐疑ふ。』

右の頌を略説致します。「出水何如未出時」未出水時何如、已出水時何如、と云ふべきを、平仄の都合上短縮して、出水何如未出時、と云うたまで。別に深き仔細はありません。——「江北江南」茲では揚子江の南北地方を云ふ。廣義に云へば、全宇宙、盡乾坤である。——「王者」これは唐宋時代の俗語、物知りのお爺さんと云ふことである、と井上君は示された。天邊の月に



問へ、と云ふこともある。木人に質問せよ、と云ふこともある。要は人に問ふより自己に反問せよ、と云ふ心底である。更に婆言を弄します。』恁麼の頌は雪竇禪師の別調であります。鶯頭に本則の智門禪師の蓮華、荷葉、そのまゝを活用して、出水以前の蓮華、出水以後の荷葉、——それを蓮華荷葉報君知、と吟じられた。諸君、刮目して看たまへ。そら蓮華は蓮華、——そら荷葉は荷葉。——荷葉を以て蓮華となす勿れ。蓮華を以て荷葉となす勿れ。どこ迄も荷葉は荷葉。どこ迄も蓮華は蓮華。——されど未だ水を出でざる時の蓮華と、已に水を出でたる後の荷葉と、是れ同か、是れ別か。別にあらず、同にあらず。蓮

華の時は盡天盡地一朶の蓮華。——荷葉の時は蓋天蓋地一枝の荷葉。——知らずや、一花開いて世界春なり、一葉落ちて天下秋、と云ふことを。』荷葉の時は荷葉のみ。蓮華の時は蓮華のみ。蓮華の外に蓮華なし。荷葉の外に荷葉なし。荷葉團々鏡よ、りも圓かに、菱角尖々錐より、も尖なり。——古往今來、——

東洋西洋、——明白分明、——現前露堂。——然るに理に通じて道に通ぜざる人は、恁麼の道理を體得せず。蓮華と云へば蓮華に、——荷葉と云へば荷葉に。——知らずや、名は實の賓なることを。——其の實たるそのものが確乎として居れば、名は蓮華でも荷葉でも、猫でも杓子でも、決して不都合



はない。影は形の名だ。影を逐うて形を忘るゝ人が多い。——  
 「江、北、江、南、問、王、老」漫りに名につき迷うて影を逐ひまはる漢  
 は、極めて近き至つて易きそのものを閑却して、未生以  
 前の面目は如何なるものか、已生以後の面目及び死後の面目は  
 如何なるものか、と東奔西走、南去北來。夜を以て日につき、  
 高僧知識の門を叩き、學士博士の家を訪なひ、之を聽き、是  
 を尋ぬる。されど心外しんがいに法を求むる間は、假令百千萬劫の長期  
 を費すと雖も、無駄骨折り。——眞箇痛快に大悟徹底すると  
 云ふことは容易でない。(衲なまが如きは至愚至鈍である故に斯く信  
 ず。)雪竇禪師、婆言を弄して曰く、如何に奔走して王老に問う

ても、要するに「一狐疑了、一狐疑」で、一つの疑雲が晴れると又  
 一つの疑雲が起る。拂へば又起り、拂へば又出る。——到底  
 疑雲の消盡する時なし。——眞箇疑雲の根源を消盡せんと欲  
 せば、自己に返照せよ。脚下を照顧せよ。誓つて心外に法を求  
 むる勿れ。心外に法を求めざれば疑雲は次第に消盡し、迷ひの  
 籠頭かごかぶを脱せずして自然に脱し、悟りの角駄かくだを卸さずして當處に  
 影を滅す。——豈痛快ならずや。恁麼いんまの痛快を體得なされた  
 其の人が智門禪師、——其の人が法幢を建て宗旨を立するの  
 である。何人が昭和の智門禪師。——多くは、蓮華の未出水時、  
 出水後、を尋問する底の人のみ。昔も今も、似たりや似たり。』



——狐につき一言附記して措きます。

狐は頗る疑の深きものであります。聞く、信州の諏訪湖、(必ずこゝには限りません。)冬季、狐が湖上の氷を渡れば、其の後は人間も渡られる。それは口碑に、諏訪明神のお使が狐であるから、其の狐が氷を渡れば、人間も渡れると云ふ明神様のおつげだ、と云ふ。——狐は一尺行つては氷の厚さを計り、耳を付けて水音を聞き、愈々安全であると確信すれば、また一尺行つて試みると云ふ。心外しんがに法を求むる修行者は、丁度狐の氷を計るが如く、一方の師家に就いて一疑を質せばまた他の疑念を生じ、他の師家に就いて疑を質せば更にまた他の疑念續出すると云

ふありさま。それが江北江南問王老、一狐疑了一狐疑。——  
 さすれば禪の修行者は悉く狐、——狐も狐、野狐である。支那百丈山の野狐が禪僧野狐の先祖にして開山であります。野狐も九尾の野狐となれば、法幢を建て宗旨を立せらるゝ。現今、法幢を建て宗旨を立てて御座る善知識なる人は果して九尾の野狐か。——總ての人が野狐と同穴に居住してをるから、野狐を野狐と見分ける者がない。野狐でもよい、徹底野狐になりきれ。コン、コン、ス、コ、コン、コン。——更に本則の蓮華、荷葉、其の意味を徹底せしむる爲に、茲に黄洋君の自力と他力と云ふ一節を呈供致しませう。(正法輪しやうぼんより拜借)



自力と他力——「佛教には自力門と他力門とがある。自力門と云ふのは、自分の力でもつて理想に向つて精進すると云ふのであるが、他力門はこれに對して、佛の力を借りてゆかんとするのである。更に根本的に云へば、肉體的にも精神的にも自己が直ちに完全性を内含してゐて、不完全なる自己が完全になる様に彼岸に向つて努力するのが自力門で、我即佛の考へである。——之に對して他力門は佛即我と考へるのである。同じ様な意味にとれるが、我即佛と云ふことは、自己の力で彼岸に向つて精進すると云ふ事で、佛即我と云ふ時には、不完全の上に完全性が加はつてゐるのであつて、完全の彼岸に向つて努力する

のではなく、我々の日常生活は佛の力の發現であつて、自然に佛の力が我々の上に現れて来るから、我々は當然彼岸に向つて努力せなければならぬと考へるのである。——此の二つの彼岸に向つて進んで行く心持には相違があるが、併しこれは結局一つのものである。以上述べ來つた即身成佛、自力門と他力門等は結局皆完全理想に向つて進む事に外ならない。然らば完全理想は果して現實に實施され得るものであらうか。一應は實現出來ないと考へる外はない。蓋し存在は既にそのものが不完全なのである。存在すると云ふ事は不完全を意味するもので、眞に完全を期すると云ふ事は結局不存在と云ふ事になる。——



我々の頭髪が伸びてフケが出る、が併しフケを完全になくする事は出来ない。フケを完全になくする事は結局頭髪をなくする事であつて、頭髪の存在を否定する事である。生きて居る者は食はねばならぬ。食はずに生き得れば完全であるが、食はずに生きるると云ふ事は死ぬる事である。即ち不存在を意味するのである。斯く考へると、不存在が完全であつて、存在するとうして不完全たる事を免れない。それ故に眞の完全は空である。従つて昔から完全になつた人は一人もない。釋迦も完全ではなかつた。此の世に現れた釋迦は人間として現れたのであるから完全である事は出来ない。釋迦にしても人間である以上物を

食はねばならぬ。着物も着ねばならぬ。物を食ふから不淨物を排泄する。して見れば釋迦も完全ではなかつた。かく考へると詰り彼岸の完全理想は永久の未來にあるもので、これに向つて努力すればする程遠くなる。そこで結局空になる迄努力する事、即ち人生は永久の努力である。然らば、佛教には成佛と云ふ事はないか、と云ふ事が問題になるが、結局不完全なる事が完全である。理論上から云へば實體の空が完全であるが、佛教の立場からは、不完全を離れて完全を考へる事に誤りがあるので、結局不完全なることが完全なりと云ひ得るのである。宇宙は實體である。これには色々の差別があるが、その全體を擲んでも實



體であり、一つくゝを摺んでも實體である。」と。——衲が黄洋君に賛成する處は、結末の全體を摺んでも實體であり、一つくゝを摺んでも實體である、と云ふそれだ。蓮華、——荷葉、

——實體々々。

左に挿畫として、身心共に蓮華であり荷葉である女傑惠春尼を紹介致しませう。火裏の蓮華、朶々開く、——兩刃鋒を交へて、避くることを用ひず、巧手還つて火裏の蓮に同じ、とは蓋して女傑惠春尼其の人を評せし句ならん。——諸君の知らるゝ小田原在にある大雄山最乗寺、其の寺の開山は了庵惠明禪師、其の妹が惠春禪尼その人であります。此の人は所謂絶世の美人、

兄が寺を開くと直ぐに弟子入りを頼みました。兄の惠明は「お前は顔が綺麗過ぎる。」と云うて初めは聞き入れませんでした。が、しきりにせがむので終に弟子にしてやりました。天然に禪を體得せしと云ふ程、萬事につき兄の惠明を驚愕させました。其の機鋒と云ひ、其の商量と云ひ、其の如法綿密と云ひ、何人も感心せざるもの無し。故に如何に不知耻の男僧でも全然側へ寄りつく者がなかつた。』茲に一つの逸話がある。或時、惠春禪尼、鎌倉の圓覺寺へ使ひに行つて坊さん連中を完全にへこました。『御承知の如く、大寺には若い坊さんが澤山をります。若い男僧の多い處へ、萬緑叢中紅一點とも云ふべき美人が天上より



落ち來るでなく、小田原最乗寺より入來だから、若き坊さんはたまらない。——美人の惠春禪尼をめぐる戀の葛藤とでも云ふべきであらう。——尤も惠春禪尼の方では何ともなかつた、あつたら蓮華ではない。——吾もくといひ寄つた。——流石の惠春禪尼も元が女であるから男子とちがつてヤサシイ。どの坊さんをも決して振らない。で曰く、「暫くお待ち下さい。私もあなたが好きになるでせう。」と、同じやうな返事をして坊さんを喜ばせました。以上の禪機を以て十人ばかりの申込みを全部引受けてしまひました。或時、法堂上に於て大問答が行はれました。此の日、大禪師は無論のこと、一山の尊宿及び禪堂の大

衆、在家の信男信女、雲霞の如く二重にも三重にもとり圍んでの大法會。——豫て申込みました坊さんの前で、禪尼いきなり眞つばだかになつて飛びつき、「さあ、どんな事でも成就させてあげます。吾を自由になさるだけの力量のあるものは遠慮なく出て來て、商量してください。」と叫んだものですから、坊さん達すつかり參つて冷汗を流した、と云ふ痛快なことがありました。『可謂、禪尼は泥中の蓮華と。——其の後、惠春禪尼、修行が進みましたから法を傳へて貰ひたい、と了庵に頼みました。（此の處が少々不出來であります、女性のこととて不得止である。）すると了庵曰く、「未だ早い。お前は姿が立派過ぎる。顔が



あまり綺麗すぎるから駄目だ。」とて、傳法を承知してくれません。すると惠春禪尼は、「何だ、そんな事か。」とあつさり云うて、いきなり傍にあつた焼け火箸で花の様な顔を惜しげもなくスツカリ焼いてしまひました。そこで了庵も始めて傳法を許しました。聞く、日本にて女性で傳法を受けた人は惠春尼が始め、と云ふことである。—— 中年になつて禪尼が火定くわていに入られた。其の時、兄の惠明が、「惠春熱いか。」と聞きますと、惠春禪尼、昂然として、「お前達の知るところにあらず。」と一蹴して、悠悠火の中に坐禪をくんで大往生を遂げられました。『快川くわいせん禪師の心頭を滅却すれば火も自ら涼しと云うて火定三昧にはいられ

た、それと難兄なんげん難弟なんていの好一對であります。古人の句を以て惠春禪尼と快川禪師を評すれば、「若把西湖比西施、淡粧濃抹兩相宜。」—— 惠春禪尼の如きは、男子以上の女丈夫、火裏の蓮華にして千古變色なし。—— 此の千古變色なき底の火定三昧は、兜率三關きうそくさんくわんの眼光落時作麼生脫、と云ふそれと異曲同工。—— 此の眼光落時の當體ちやうたいを無盡居士吟じて曰く、「人間鬼使符來取、天上花冠色正萎、好箇轉身時節子、莫教閻老等閑知。」とある。好箇轉身云々と云ふ、それそれは惠春禪尼其の人でなければ眞箇の處は知れません。「お前達の知るところにあらず。」と兄に向つて三昧底を示されたは實に可敬、可賛、又可拜。—— 惠春禪



尼の眞面目は、火定、三昧底の處に露堂々である。』男僧に對して、さあどんなことでも成就さしてあげます、と云うたは隨機の方便、茲には惠春禪尼の面目は無い。』禪を修行する女性の方、惠春禪尼の終りを學んで始めを學ぶ勿れ。――

禪學研究の順序としては、古來より、法身、言詮、機關、難透難解、五位十重禁、臨濟錄、虛堂錄、槐安國語、末後の半關、最後の一槩、と修行をさせ、而して修行するもの、要する眼目、本領、目的は、生死を脱得して、三界を出離する、それにある。故に總ての修行は生死を脱得するが爲、あらゆる研究は三界を出離するが爲。若し三界を出離するに念なく、生死を脱得する

に心なき者は、禪の研究も禪の修行も、無用であり無駄である。』

―― 現今禪を研究し禪を修行しつゝある人々が、其の進歩、其の發展の遅々として早からざるは、生死を脱得するに念なく、三界を出離するに心なく、漫然、禪を研究し禪を修行するからであります。衣食に御不自由のなき御隠居が古器物を玩弄なさる心底で、遊び半分、日ぐらし半分でなさるから進歩しないのは理の當然、發展の遅いのは必然である。』碧巖百則の如き、一則々々、生死脱得の深旨、三界出離の要目。見るべし、問ふ人、元より其の心底。知るべし、答ふる人、豈他心あらんや。問者をして悉く、生死を脱得せしめ、三界を出離せしめんが爲であ



る。』生死を脱得し三界を出離し畢竟此の何事をか爲す。曰く、生死を脱得して生死に遊び、三界を出離して三界に遊ぶ。遊ぶは何の爲ぞ。生死に出没する其の人、三界に輪廻するその人、それを救はんが爲、それを度せんが爲、第二義門に下り、法幢を建て宗旨を立し、錦上に花を鋪き、老婆の婆心を起し、手は黄葉を拈じ、口は落草を談じ、拈泥滯水、灰頭土面、或は馬を度し、驢を度し、或は棒を振り、喝を吐き、隨縁赴感、臨機應變、縦ひ虚空は盡くるとも、衆生無邊誓願度、之是が最初の願目にして亦最後の願目である。此の願目なき研究は外道の研究、此の願目

なき修行は悪魔の修行。—— 努めて悪魔の修行をなす勿れ。  
 —— 強ひて外道の研究をなすを休めよ。—— お互は、或は悪魔の部類、外道の社員ではないか。—— 斷然否とか然らずと云ひ得る人ありや。—— 重ねて云ふ。禪の研究、禪の修行は、衆生無邊誓願度に始り、衆生無邊誓願度に終る。其の願目を貫徹するが爲に、生死を脱得し三界を出離す。而して還り來つて生死に幻出し、三界に遊化し、以て衆生無邊誓願度。—— 記憶すべし之是の一大事。失念する勿れ之是の一大事。—— 之是を記憶し、之是を失念せずして、禪を研究し、禪を修行すれば、研究の進歩其の速きこと比するにもなし。修行の發展其



385  
528

八四  
の、大なること、喩ふるにもものなし。——諸君、胸襟の法蔵を豁  
開し、自己の家珍を運出すべし。豁開する爲の古則、——運  
出する爲の公案。——公案そのものに迷ふ勿れ。古則そのも  
の、に、使はるゝ勿れ。』——

(昭和十二年五月二十二日講演)

昭和十三年六月十五日印刷  
昭和十三年六月二十日發行

發行兼  
印刷者

佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一  
三井合名會社内

發行所

東京市日本橋區室町二丁目一番地一  
三井合名會社考査課



終

